
悼み

形・愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悼み

【Nコード】

N9872D

【作者名】

形・愛

【あらすじ】

富裕層の少年リフと女給の少女ルナ。二人は心の中でお互いを想っていたが、その間には”主従”という厚い壁が立つ。そして…その想いは互いの悲しい運命によって…惨劇の”その日”へと二人を導いて行く…。

プロローグ：幼いころ（前書き）

今回の話しでは無いですがこの先の話しでは流血表現等がでてくる可能性がございます。苦手な方はお気をつけください。

もともとは短編小説の予定だったものですから、連載といっても全体的には短めかもしれません。

プロローグ：幼いころ

「二人だけの秘密の挨拶をつくろう!」

「…え…?」

少年の突然の言葉に、女給の少女は驚き顔を上げた。目をキラキラさせながら、少年は続ける。

「昼間は会えるからいらないね…夜はランプを使おう!えーっと…」
身振り手振りで説明する少年の首に、さっきまで本人にせがまれていた花の首飾りをかけてやりながら、女給は気になったことを聞いた。

「ですがリフ様…」

「わ!やっぱり上手だね!手先が器用っていいな」 「なぜそんなものが必要なんです?今みたいに会って話せば…」

そう言うのと、少年…もといリフは急に黙った。

「だって…ルナ怒られたじゃないか…父上に…」 「あ!あのことでですか?」

リフ様はお気になさなくていいですよ!」

「良くないよ!あの日、日がくれても帰ろうとしなかったのはぼくの我が儘だよ!?なのに…ルナばかり怒って…」

「リフ様…あのとき私はあなた様を止めなければならぬ立場だったのに…その…我が儘を許してしまっただんです。怒られても仕方ありません…」

「でも…やっぱりおかしいよ…父上なんか嫌いだ…」 「最近富裕層を狙った犯罪が多いですから…旦那さまの心中…お察し下さい…」

「うん…ルナは同年なのに考え方が大人っぽくてかっこいいなあ…」

「そっ…そんなこと…」 リフがやっと笑ってくれたことに内心ほっとしながら照れて赤くなっただ頬を押さえた。

「さっさあ！もうそろそろお帰りのお時間ですよ！」
「？分かった。」

そうして二人つれだつて屋敷へ歩きだしたときリフが「あ！」という声と共に立ち止まった。

「思い出した！」

「え！？」

「夜外に出なくてもいい挨拶！」

「そのために考えてたんですか…。」

「えーっと…おやすみは…これね！」

そう言つて頭を深々と下げてみせた。

「極東の国では挨拶としてよくするんだって！」

「まあ！でもリフ様に頭を下げさせるわけには…」

「そんなつまないこと気にしないで！」

「でも…」

「友達なんだから！」

「…友達…ですか…？」

「うん！」

今日一番の笑顔でリフは笑った。リフが言った”友達”という言葉は、ルナにとって…女給の心をわきまえ、”主従”という言葉の意味を知るルナにとって…悲しくも嬉しい言葉だった。

「ありがとう…ございます…」

「ルナ？大丈夫？」

「はい…すみません…」

「謝らなくていいよ。それじゃあ…」

帰ろう？とのばされた手を取り、ルナもまた、今日一番の笑顔で笑った。

「…はい…」

二人仲良く歩いて行く後ろ姿はほほえましく幸せで溢れていた。

数年後…この国も何もかもが変わってしまつ…地獄へと…姿を変え
る…”その日”さえ…来なければ。

プロローグ：幼いころ（後書き）

いかがでしたでしょうか… 人生初の小説でしたので何かとお見苦しい点もあったとは思いますが… 少しでも皆さんに楽しんでいただけていれと思います。 これ以上長々と書くと言い訳だらけになりそうなので… では！ ありがとうございます！

第一話：銃（前書き）

今回の話も流血表現はありません。あと、編集する際のミスで無意味な改行になっている箇所が少々ございます…。読みにくいですがどうか大目に見て下さい…。すみません…。長々と失礼しました。それでは、少しでも楽しんでいただければ幸いです。

第一話：銃

その国は、貧しかった。

だから、資源が豊かな隣国に戦争をしかけた。

この戦争により、ある者は巨万の富を手にし、またある者は家族を、財産を、住む家を無くした。

戦いに決着はつかず、戦争が始まってからもうすぐ3年がたとうと
していた…。

「父上がしていることは、人殺しと同じだ…。」

窓の外を眺めながら、リフが呟やいた。

「…リフ様…？」

ルナのきょとした顔を見たリフは、にっこりと笑った。

「ルナは、変わらないね。ちっちゃいころからびっくりしたらその
顔だ。」

「か…からかわないで下さい…！」

「？僕、怒られるようなこと言った？」

「そ…そんなことは…。」

ルナは、すぐ赤くなる己の顔を心底恨みながら、急いで話題をもと
に戻した。

「あ…あの…！」

「んー？」

「さっきの…旦那様のなさっていることは…その…。」

「ああ…人殺し？」

「…はい…。」

窓に向けていた体を、ルナに向け直しながら、リフは答えた。さっ
きの笑顔は、もう消えていた。

「だってそうじゃないか」

「え…？」

「あ、ほら。」

窓から離れ、ルナに外を見るように促した。

「あの兵士が持つてる銃、父上が作って、売ってるんだよ。」

「…それは…。」

リフの父親、クライブは、戦争が始まってすぐに、銃やその他武器の製造、貿易に目をつけた。その狙いは的中し、もともと裕福だったこの家は、

さらなる富を手にした。だが…クライブの一人息子で、心優しい少年、リフにとって、父親のその行動は許しがたいものだったのだ。そして、リフの成長に従い、当然のごとく親子仲は険悪になり、すれ違いも増えていった。リフの周りの環境も徐々に変化していった…。

「父上が売っているのは人殺しの道具だよ。育ててもらっていることはもちろん感謝してるよ…でも…銃が一丁売れるたびに…どこかで…誰かの家族が…殺されているんじゃないかって…。」そういつて…少し黙った。そして…小さな声で、続けた。

「…母上…みたいに…。」

リフの脳裏に、ルナに出会う少し前の記憶がよみがえり、足から力が抜け、そのまま床に座り込んだ。いつもと違うリフの様子に…ルナは、優しく声をかけ、肩にそっと、手を触れた。

「よろしければ…お話ししていただけませんか…？少しは…楽に…。」

「ありがとう…。ルナ…、話し…聞いてくれる…？」

「はい…。」

第一話：銃（後書き）

小説を読んで下さりありがとうございました！ 内容は…私的には結構未消化な部分が多いです…。後々の話で取り戻せればと思います。そんなことしないでいいってのが一番ですが（汗）。いきなり主人公の過去話じゃ話すすまん少年マンガ状態になりそうですね…「それでも次回も読んでやる！」と言って下さるあなたは神様？仏様？ 長々と失礼しました。ここまで読んで下さってありがとうございます。次回もよろしく願いします！

第二話・リフの過去・前（前書き）

今回の話も流血表現はありません。…こ…これからと言うことで。

それでは、楽しんでいただければ幸いです！

第二話：リフの過去・前

ルナが、女給としてこの屋敷にやってくる少し前に、時間は遡る。

高い塀に囲まれた、広大な敷地を有する

屋敷の庭から、元気な男の子の笑い声が響いてくる。

「母上ー！見て！すごく綺麗な蝶々でしょ？」

「あら、ほんと…きれいなえ。」

リフの手の中では、小さな蝶が鮮やかな黄色い羽を、呼吸にあわせてゆつくりと上下させていた。

「でもね…リフ、この子は離してあげないと…。」

「えー！…やだ。」

リフは、頬を膨らませ、下を向いてしまった。母親（名はティーナという）は、優しく、幼い我が子が解るように続ける。

「リフ…リフも遊んだあとは、お家に帰りたいでしょう？その子も同じなの。」

リフが、ゆつくりと顔をあげる。

「同じ…？」

「そうよ。」

ティーナは、リフと同じ目の高さになるようにかがんだ。

「その子ももうお家に帰りたいの。その花壇よ。」

さつきリフが蝶を捕まえた、手入れの行き届いた花壇を指さした。

「うー…」

「それにね…その子をお家に置いてたら、リフが遊びに行っている間に…」

「え？」

「母上が食べちゃうかもー！！！」

「きゃー！！！」

立ち上がる的同时に叫んだティーナの言葉に驚いたリフは、悲鳴をあげると、あわてて花壇の方まで走って行き、蝶を放した。

「よしよし、リフはいい子ね。」

満足気なティーナに、リフは頭を撫でられながら聞いた。

「は…母上は…蝶々…食べる…？」

「んー？母上、カタツムリは食べたことあるけど…蝶はないなあ…。」

「

「食べないで！絶対！！」

「はいはい。」

二人、そんなやりとりをしていたら、女給が呼びにきた。

「奥様！リフ様！ご主人様がお呼びです！」

「あら、いけない。今日はお客様がいらっしゃるんだったわ。」

「お忘れでしたか…。」

「ええ、すっかり。ささ、リフ、早く戻って支度をしましょう！」

「はい！」

駆け足で屋敷に戻っていく元気な二人の後ろを、女給がおろおろしながらついていく。

「あっあっお二人共！転んで怪我でもなさったら…！」

もしそんなことになったら…旦那さまに怒られるのは私なんですよ

「！！！」

…半泣きで…。

第二話：リフの過去・前（後書き）

えー：前回の後書きでいった通り、冗談抜きですすまん少年マンガ状態になってきました。打ち切りにならなきゃいいですが（苦笑）。こんな感じで過去編がだらだら続くかもしれないが、今後とも何とぞよろしく願います！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9872d/>

悼み

2011年2月3日02時17分発行